

## ウィリアム・ジェームズの宗教論 (III)

鈴木 孝

Religion of William James (III)

Takashi Suzuki

The aim of this study is to investigate the organic activity of a religious state of mind, in the "varieties of religious experience". Referring to the psychology of W. James, I wish to study the lecture VIII (the divided self and the Process of its unification) of the "varieties,.. James's study in the "variesties" was to give a descriptive survey of man's religious propensities. The problem I have set myself is to pursue the process of the devided Self and it's unification, then I must denote the problem of "subconscious force" of self. And I find it is the very core of W. James's study of religious experience. After all we must watch the function of subconscious force, that is, the organizing centre of Self. It is the key to specify the religious experience.

### (1)

私はいきなり、P. M. Van Buren のウィリアム・ジェームズについての小論からの引用をしよう。なぜなら、今日のジェームズへの関心がそこにみられるから(1)。「ジェームズ形而上学の重大な特色は危機の承認にあることを私は指摘しようとした。今日の神学は、私たちの多くは生活において、言語の有する困難性に由来する重大な結果に背をむけて、次のような誤解にはまりこんでしまっているのだ。すなわち、ある種の実存主義哲学者に注目する人々、あるいは、分析哲学とともに歩み、フランスやドイツの思想家があえなくもカテゴリーの誤謬にもつれこんでしまうのを目のまえてみている人々、そんな人たちの間にみられる誤解である。ジェームズは多分、両者を援けることができたであろう。アメリカの宗教思想はウィリアム・ジェームズによって設けられていたいくつかの手がかりをおうのが一番妥当なのである。すなわち、ジェームズは、形而上学としての危機と言語の自己対象化の性質 (self-referential character) は同一の金貨の両面であり、同一貨幣価値をもっている。」以上はジェームズの現代的意義が明白にのべられて大いに興味ある問題である。この引用のなかでの第一の「形而上学における危機」とは、描象的思惟が静的な論理的要請からの虚構にすぎないことを指摘するものであり、そのまま、その視点は第2の言語の問題に移行されることになる。というのも、われらの描象は概念によっておこなわれ、その概念化のはたらきは言語の登場をまってはじめて可能となるのであるから、ジェームズの自己対象化の性質とは言語のもつ主観性介入の契機を指摘したものである。この点についてジェームズは、まるで、言語分析の先駆者であるかのように、独自の鋭い見解をいだいている(2)。van Buren の指摘とはべつに、ジェームズの現代的意義は、彼の哲学、また、心理学にみられる「自我」の分析であろう(3)。

彼の哲学が人間学であったこと、それは彼の説く根本的経験論の主役以外のなにものでもないのである。いわゆる多元としての人間である。ジェームズの自我論を土台にしてその意識の心理的構成要因の徹底的な分析が今日なお—そうおこなわれねばならない。あるいは、ジェームズからデュローイまでのプラグマティズムの経緯をたどることも忘れられてはならないことである。とくに、ジェームズとホワイトヘッドの相関性は興味ある問題である(4)。あるいは、ジェームズの宗教心理に、現象学的アプローチをはかる研究(5)など、今日の課題として実に大くの方向においてジェームズは検討されている。私は、この小論で彼の宗教論(6)から問題を取りあげ、検討していこうと思う。

## (2)

私はジェームズの宗教論のなかで「分裂した自己とその統一の過程」(the divided self and the process of its unification) (7)を中心に、ジェームズの自我論や哲学との関連をはかりながらその考察をすすめる。

ジェームズ宗教論は、健全な精神 (healthy-mindedness) と病める魂 (sick soul) という二つのタイプが典型として指摘されていた。私は前回の小論(8)で healthy-mindedness を次のようにまとめた。(一)このタイプからの宗教の特徴は宗教が幸福と密接に結びついていること。すなわち、幸福という感覚をその宗教態度の基底に秘めていなくてはならない。この場合の幸福とは、自分および自分のまわりの環境の肯定、心の包括的な弾力性に富んだ積極的な活動性から生ずるものである。(二)人生は善なるものである。同時に自然も絶対的に善である。(三)自己の内的体験としての詩的構成 (poetic fiction)、または、ポイエシスが重要な要素になっていること。(四)主体としての自我 (I) は本来はこのタイプの宗教態度の積極的要因をなくしていること。以上の要約をおこなった。いいかえれば、生物学的要請ともいえる、自我 (I) の無限な自己発展が、この healthy-mindedness の特色であるといってよい。もともと、生活圏としての個人の具体的経験が示す内実とその効用性こそジェームズのラディカル・エンピリシズムの主要なモメントであるのであるから、その次元において前述の healthy-mindedness はおのずから積極的な活動性が与えられているとみてよいであろう。とはいえ、ジェームズは宗教論のなかで、もう一つの精神の型である病める魂 sick soul を説く。それは、無限に自己を細断し、自己のもつ価値の崩壊をみずにはいられない自己否定的自我である。健全な精神と病める魂の差異について、ジェームズは次のようにいう。すなわち、健全な心のキリスト教徒は罪からのがれることを願い、病める魂のキリスト教徒は、犯した罪に呻き、もたえ苦しんで止むことがないであろう。後者は悪に固執し、悪を最大限に拡大して、真剣に苦しめるだけ、自から苦しもうとするものである。ジェームズは、挫折としての病める魂を生活にどう位置づけようとしたのか。たとえば、彼の次のような言葉をみていただきたい。

「ロバート・ルイス・ステイヴンソンは次のようにのべている。——実際、人間の運命にはどんながむしゃらな人も無視できない一つの要素がある。その他のことには成功するが、それには成功しえないもの。失敗は私達の運命なのだ——私達の本性が上のように失敗に根ざしているのなら、神学者達が失敗を本質的なものとみたり、失敗がうみだす謙遜という個人的経験をとおしてのみ人生のより遠深な意味に達することができると思うのもなら不思議ではない」(9)。ここでのべているように、sick soul の挫折こそ、そこにより深い人生の意味がかくされているというのだ。いいかえれば、挫折した自己、二度生まれ型の (twice born) 自我は宗教性への真の契機を含んでいるということである。私はさきに、前論文でジェームズの第一の精神型 (healthy-mindedness) が生活の有機的構造を積極的に展開するものであることをのべておいた。しかし、もう一つの精神

作用である病める魂 (sick soul) はいかなるはたらきを持つものであろう。それは、ジェームズ解明の鍵の一つであることは言うまでもない。ジェームズは宗教論のなかで、とくに、分裂した自我 (the divided self) はいつも後悔の念につきまとわれ、苦悩し、気まぐれで、一貫性がない。それは、道徳的気質と知的なものが不完全に統一されたものというのだ<sup>(10)</sup>。不完全な統一であるかぎり、内部分裂は深い傷となって、それはまさにプロメテウスの鎖である。そこでは、存在の亀裂にはまりこんだ車はむなしく軋むのみなのであろうか。

分裂した自我はまず第一に次のような場合にみられるという。すなわち、宗教的自己と現世的自己の葛藤、その結果として、罪の意識の自然発生。例をみてみよう。「私は、一方ではひそかな祈りと読書を続けながら、他方で、非常に粗野で荒れていった。しかし、神は私の自滅を欲さなかった。神はいくどとなく私によびかけたまい、非常な力で私の良心を動かし給うた。だから、私は娯楽的なもので自分を満足させることはできなかったし、歓楽のさなかに、失なわれた零落した状態をおもい、私の友人からはなれようとおもったものであった。——略——私は肉の歓楽から家へもどったとき、いつも罪悪を感じていた。そして、私は床についたあとでも、いつも、まぶたを閉じることができなかった。私はこの世で一番不幸なものの一人であった」<sup>(11)</sup>。この場合、典型的事例はアウグステイヌスである。この局面での分裂我は、主に、情動的分裂我ともいってよいであろう。第二のタイプとしてはトルストイ型がある。ジェームズがトルストイにその典型をみた分裂は深刻なものである。彼の全存在が一瞬のうちに崩壊してしまう。したがって、蘇生への糸口は容易にはみいだせない。第一に人生のすべての価値に対する欲望が受動的に失なわれていく。第2に、結果的に、世界はよそよそしいものになり、知性を刺激し、はげしい、苦悩にみちた質問にむかい、自からは哲学的救援を求めて努力することになる。われわれは物質的事実と感情的価値とが不可分な融合体として存在しているのが普通の場合とするなら、この物質と感情の二要素がゆがめられ、バランスを乱しているとき、病理的 (pathological) とよぶ状態が生まれるというのである。だから、トルストイでも、ある瞬間の亀裂はすべての価値体系を崩壊して、人生における実在 (reality) はすべて表現を変えてしまう。世界は遠く、よそよそしく、不吉に、奇怪なものになる。トルストイの言葉をみてみよう。「このことは私の外部環境に関するかぎり、私がまったく幸福であるというべき時に起ったのであった。私には愛し愛される良き妻がいた。良き子供たちも、大した努力もしないのに増えていく多大な財産もあった。私は以前にもまして、親戚知人から尊敬されてもいた。——略——そのうえ、私は精神も正常で病気もなかった。反対に私は私と同年の人たちになような体力と精神力をもっていた。——略——それなのに私は生活上のいかなる行為にも納得のいく意義をみいだすことができなかった。驚いたことには、私はこのことをはじめから理解していなかったのだ。私の心の状態は意地の悪い、ばかげた冗談をいって誰かにからかわれているようであった。人は人生に酔いしれているかぎり生きることができる。だが、酔いがさめると人生とは愚かしい欺瞞であると思わざるをえないのである。人生について、もっとも真実なことは人生はまさにおもしろくも、おかしくもなく、それがすべてまったく残酷でばかばかしいものであるということだ」<sup>(12)</sup>。トルストイの挫折と苦悶はまさに克服されて信仰に入るとはいえ、そののちでも、それはある要素として自己の内部にひそんでいた。ジェームズはトルストイを、終生、分裂した自我に苦悩した人であるという。しかし、この極度の苦悶を克服できたのは、なにものかが、心の内部に湧きでていたからだとしてジェームズはいう。それは、次のような言葉で代弁される内容を核にするのでなければならない。それによって人が生きるようなもの (by which men live)<sup>(13)</sup>である。

分裂した自我を救うものは、刺激であり、興奮であり、信仰であるという。この場合の再生した

自己の誕生について、ジェームズは回心 (conversion) についてのところでも詳しくふれている。

ここで問題になっている精神の蘇生、または宗教的回心は「心に湧きでているなにか」によっておこなわれるのである。それは、宗教的回心において宗教の真の意義が突然、ある人に開花する生命の再生である。ちょうど、競技者があるとき突然に競技の深い妙味を自から自覚するように。ジェームズは回心にも意志型で随意的に比較的ゆっくりとおこるものと、不随意的に突発的におこなわれるものがあることを述べている。彼がより関心を示したのは後者である。これを、ジェームズは「自己放棄型」(the self-surrender type) ともいっている。ここでの放棄とは「主よ、私は私のなしあたるすべてのことをしました。私はすべてをあなたに委ねます」ということである。

人は価値を求めて、最後まで、その力のつきるまで努力するが、その極限においては自己を投げ出すことによって新しい価値体系が自己にはぐくまれてくるというのである。

この現象をジェームズは当時、ようやく着目されていた subconscious Self (潜在意識としての自我、または下意的自我) に、また、その次第に潜在意識的に成熟していく過程 (subconsciously maturing process) に結びつけて解明しようとしている。次に引用する文は subconscious な意識の存在をかなり明確に示している。「回心とは義 righteousness に向って努力するというよりはむしろ、罪 sin からぬけようとする過程である。人間の意識的知力と意志は理想にむかって努力しているかぎり、ぼんやりと不明確にしか想像されないものをめざしている。しかも、その間に彼の内部でまったく有機的に成熟しているある力が、まえもってえがかれている結果にむかって進んでいるのであり、人間の意識的努力は subconscious なるものを、その場の背後で解放しているのである。subconscious なものは、彼等なりで再編成にむかってはたらいっており、また、すべてこれらのより深い力の目指している再編成はかなりはっきりした明確なものであって、人間が意識的に考えたり、定義したりするものとは明らかに異なっている。それ subconscious なものは、意志的努力が真の方向からずれてしまうことによって、事実上、明らかに妨害されているのである」(4)。

subconscious Self によって宗教的意識の昇華を解明しようとする努力は、そののち、Freud や Jung の心理学に引き継がれていくのである。しかし、ジェームズの宗教的経験の心理的分析は現代においても無視しえない重要な契機を、研究分野に与えていることは否定しえない事実である(4)。

これまでの説明で subconscious force が存在していることは示摘されたが、それがどのように働いているのかが述べられねばならない。宗教的感情において、自我はかかる subconscious なるものの存在を無視しえない。しかも、その場合、それは潜在としてのよりよき自己 (better Self) でなくてはならないという。すなわち、潜在意識はよりよきものであって、それは Self 全体を統一するものと説かれる。より効果的に、本来的に、潜在意識が働らくために人はリラックスし、精神の緊張をゆるめることが肝要である。義 (righteousness) のために生じてくる大いなる力を、さらに独自の方法で完成せよということだ。すなわち、成熟した潜在意識は下手に手出しするな、それはみずからの力で、他の助けなしに自我を展開しなければならないというのである。たとえば、苦悩や絶望のあまり生根つきて、疲れきってすべての努力を放棄したとき、だから、おのれの自我に頓着しなくなったときとつぜん自我の飛躍がみられるというのである。それは、無関心な自我をとおしておこなわれる飛躍である。ジェームズの心理学で説かれている客観我 me にもはや固執しなくなった人がこの「無関心」の状態になるといってもよい。それを宗教感情でみてみよう。たとえば、瞬間的に恩寵をうけやすい人というのは下記のように説明される。恩寵をうけやすい人というのは広い意識領域を有していて、識閥下 subliminally の心的作用が活発で一次的意識の

等質性 equilibrium が突如くつがえされるような人である。反対に意識の場 field が固い人は subconscious force が活発に働らきにくく、とつぜんおとずれる回心はみられない。そこでは、目覚めている意識、客観的意識、第一次的意識（客観的的自我意識）が優勢をしめしているのだから。

### (3)

以上、私はジェームズの宗教論から、分裂した自我の統一過程を、彼の回心論と合せながらのべてきた。そこでいえたことは、分裂した自我は宗教的の自己と現世的の自己の対立の結果生じるものであること、そこから罪の意識が発生すること、そして自己は挫折におちいりがちであるということであった。このような苦悩にみちた挫折を乗り越えるという可能性は、いずれの場合でもなにかが、すなわち、新しい自己の生命力のようなものが心の内部に湧き出ることによって期待されねばならない。

無論、それは、その人の人生に新しき価値を与えるものでなくてはならない。心の内部に湧きでるなものか、本来、第一次的な客観的的自我意識 (me) の基底にある subconscious な意識のはたらきを予測させるのである。それによって一次的意識（客観的意識）の等質性がくつがえされ、宗教的感情も主体的にその密度を高めていくといえよう。自我の分裂をすくう subconscious な意識作用を私はジェームズ心理学での「自我論」と併せて考察しながら、その構造を分析追求しようと思う。彼の自我論はおよそ次の A, B, C, のごとくまとめることができよう。

A. もともと、ジェームズのすべての研究分野の基底には「意識の流れ」という現実把握の態度が前提化されていることは誰も否定しえないであろう。ある種の意識が進行してということ。流れとしての心の状態がたえず継起しているというのである。この意識の特徴は次のごとくである。1) かかる状態は個人の意識である。2) それはつねに変化している。3) それは連続している。4) それは対象から一部をとりだし、それに興味を感じ、その事象以外を排除するから選択的である。と以上のごとくなる。

B. そして意識は本来、「流れ」としかいえないものであるが、内容的には、主我 (I) と客我 (me) の二つの属性をもっている。客我とは知られたる自我 (the self as known) であった。それは過去の、比量的、反省的なものである。われわれが客観とよんでいるものはこの領域から生じると考えるべきである。一方、主我は個々のばらばらな、空間的等質的な客我を、生きた現在の流れで統一するなにかである。それは流れているもの、無意識なもの、不連続なもの、異質的なものを自己の本来的特性とするものである。過去の性格の客我 me が固定化するとき、それを未来につきだす媒質 (medium) として意識構造の底部をささえているものであった。

C. さらに、この両者、I と me を「純粹経験」として、ジェームズは有機的にとらえ、固着しがちな対立 (主我と客我) をのりこえようとした。それが中性的な意識の流れである。だから、ジェームズにいわせるなら、たまたま、主我の系列を強調したときは主体としての自我や主観がうかびあがることになるし、客我の系列をのみたどるときは固着した客観がうかびあがることになる。もともと一つのものを二つの独立したものと考えがちなわれわれの傾向こそ充分に反省されねばならないものとジェームズはいうのである。くりかえすが、二つの線が、または、二つの群の交叉するところに、「純粹経験」が位置していると、便宜上、そう考えることはジェームズの有機的な工夫の所産といってもよいであろう。それほど、われわれの意識の主我と客我 (または、主観と客観) の固定的対立は根強くわれわれをしぼりつけてしまっているから、その打破には「純粹経験」とい

う表現しなかつたのである。あるいは、意識の構造を「中性的」という場合も同じような要請からくるのであるといつてよい。

以上が彼の意識分析の基礎構造であるが、それと本論の「分裂した自我」がいかなる関連があるのであろうか。以下、考察を続けよう。

ジェームズは分裂した自我を次のように考えた。それ（分裂した自我）が宗教を見いだしていくのは多くの解決法の一つにすぎない。精神の内的不一致を改善するというのは、心理学からみれば一般的過程であつて、それは必ずしも宗教の形式をとる必要はないとされている。宗教では回心といっているが、一般的には新しい価値体系への新しい誕生といっているものである。すなわち、愛の自覚、貧欲、復讐、愛国心などという価値が、まったく新しく個人に目覚めていくのも、宗教における覚醒と異質ではないというのである。だから、ジェームズの宗教への考察は種々の他の事象にもあてはまるが、宗教に最極限の人間心理（意識）がしめされていることに興味をもち、そこに深い人生の意味を見いだそうとしたのである。

sick soul（病める魂）としての自我の挫折は主として、罪の意識すなわち、悪への凝視から生じるものであつた。それ故、悪への凝視は、客観的に自ての存在を凝視することであり、それはとりもなおさず、客我（me）がその思考を比量的に、等質的にすすめていく所産であると考えられる。主我（I）は意識の基底にはたらくものとして、異質的、飛躍的なものであり、それは本性上、苦悩や挫折とは結びつかないものであつた。したがつて、自己を積極的な意味で展開する主我は、healthy-mindedness（健康な精神）に見出されるものであつた。さて、ジェームズは回心とか分裂我の統一をどうあつていたであらう。彼によれば、分裂我の再生、更新はあくまで自力で、他者の手だしのない状態でおこなわれると説かれた。このとき、分裂我は、分裂を分裂としてうけとり、苦悶の極限でこれ以上耐えられなくなったとき、自我が自己への関心をまったくすてさつてしまい、まったくの無関心の状態になつたとき、とつぜん、飛躍的に新しい価値体系にと自我の統一（回心）がおこなわれるのだといつたのであつた。さらに、この過程は自我構造のなかのある潜在意識の力（subconscious force）によつておこなわれると確信をもつて断言されたのであつた。

このことは、分裂我は sick soul の精神から生じる、人間性の一つの真実であり、それは苦悩を本質としながら、もはやそれにとどまることが許されず、識閾下のプロセスをモメントにして、ふたたび未来につきだされていくのである。この精神のプロセスは二度生まれ型の精神とも云われるものであり、客我が、極限において、無関心（すなわち客我の放棄）となり主我の潜在的なもの力によつてバランスを取りもどすのである。だから、それは、とりもなおさず healthy-mindedness への回帰といえないであらうか。分裂した自我をその本質上、自己のものといえないのが「健全な精神」であつた。なぜなら、本来、静的にそこにたつた断片としての客我は、流れる主我とは異質の構造をもっているものであるから。だから、この場合の主我に吸収されていく客我は、自己を捨てることによつてより高次な、あるいは、最も高次な主我（健全な精神）に進化しているのだからなければならない。かくして、分裂した自我は、もっともみどり多い統一を遂げたことになる。

健全な精神とは自己と世界の発展するのを信じて素朴に対象（世界）に無限に融合していくものであつた。この融合とか、真の自己拡大は客我（ジェームズが心理学でいっている物質的客我とか社会的客我）の所産でないことはもはや自明である。同時に、たんに、行為する主我（たしかに異質的であり飛躍的ではあるが）のすべてが、エマーソンやサンタヤナヤソーローの説く高次の精神に達することは不可能である。むしろ、かかる宇宙的背景（cosmic setting）にせまりうる意識は真の自己拡大を期して、意識的、無意識的にすべてをすてさらねばならないはずである。ジェーム

ズ自身の healthy-mindedness についての説明をみてみよう。「人間の中心的重要事は、無限の生命 (Infinite Life) と一体であることを識り、それを實現することである。この神的なものが私たちに流入するようにわれわれを充分に開かねばならない」(10)と。すべてをすてさらねば高次の健全な精神のもつ次元にまで達することができないといったが、それは、心を全開して(心の蟠りをなくして)すべてを(主体と客体の間を)融通無礙の状態におくというのにならぬであろう。

その場合、そこにある精神の状態は健全な精神や潜在意識的(下意識的)領域での心的エネルギーの昇華といってよいものであるだろう。分裂した自我とか、病める魂の窮極点でも、みずから潜在的下意識にエネルギーを凝らすことによっておのれの昇華をはかったのであった。ジェームズは宗教的心情の極限において、生命に中核として働いている subconscious なものを明白に直視し、この神秘的ともいえる事実を、ひたむきな愛着をもって把握せんとしたのである。二つの型としての健全な精神と病める魂はそれぞれが統一され、更新されるとき、両者は違った道程から同一の座標に到達していると考えたほうが至当であろう。

本論では、この分裂した自己のたどる道程を明らかにするのが目的であった。はじめに意図した計画は達せられたと思う次第である。

なお、上記の subconscious なもの(意識の中心的核と考えられるもの)がかくのごとく昇華したとき、「超越信仰」over-belief が生じるとジェームズは説明している。このとき、一身を賭して危険をもかえりみない人間の宗教的エネルギーがみられるのであり、それがいかに貧弱なものであっても個人の真摯な意識であるならば、われわれは誠実にそれを認めねばならないとしたのである。この over-belief が自己の客観としての意識からも、主観としての意識からも隔離されたものでないことが明らかになれば本論の目的は達せられたのである。over-belief そのものの考察は次の機会にしよう。

(注)

- (1) M. Novak, *American Philosophy and the Future*, P. 103.
- (2) W. James, *Some Problems in Philosophy*, P. 199.
- (3) T. Flournoy, *The Philosophy of W. James*, P. 231.
- (4) C. R. Eisendrath, *The Unifying Moment*, cf.
- (5) M. Novak, *Some Problems in Philosophy*, P. 247~269 (W. James and the phenomenology of religious experience by J. M. Edie)
- (6) W. James, *The Varieties of Religious Experience*.
- (7) *ibid*, lecture VIII.
- (8) 東京家政大学研究紀要 第9集, ジェームズの宗教論(II) cf.
- (9) W. James, *Varieties*, P. 135~6.
- (10) *ibid*, P. 164~166.
- (11) *ibid*, P. 170~171.
- (12) *ibid*, P. 150~151.
- (13) *ibid*, P. 184.
- (14) *ibid*, P. 205~206.
- (15) W. Grensted, *The Psychology of Religion* (Oxford University Press) cf.
- (16) W. James, *Varieties*, P. 99.